

ま え が き

戦後の教育は児童生徒の基礎学力を低下させたといわれ、学力を向上させなければならないという問題が、単に教育界においてのみならず、一般社会からも、ここ数年来大きな関心をよせられてきた。教育実践の場はもちろん、行政当局も、この点地道なたゆまない努力を続けてきたので、今日では児童生徒の学力はいくぶん向上してきたように見うけられるが、いまだじゅうぶんとはいえない状態である。数年前から文部省はこの学力の全国的な調査にのり出し、さらに学習指導要領の改訂を行なって、学力水準の向上をはかろうとする方向を明らかにした。こうして学力向上の問題は、今日学校教育における最も重要な問題となっているのである。

ふりかえて本県児童生徒の学力について見ると、文部省の全国学力調査の結果ではかなり低い状態にあるといわねばならない。もちろんこの全国学力調査の結果だけから直ちに本県児童生徒の学力の全体を云々することはできないが、とにかくこのような事実を考慮に入れるとき、本県児童生徒の学力向上の問題は、本県教育の問題として一日もゆるがせにできない重要かつ緊急な問題と考えられるのである。

以上のような点から当研究所においては、これまで行なってきた学力研究の積み重ねの上に、34年度からは、特に構想を新たにして、「本県児童生徒の学力を向上するために、教育条件をいかに整備し、学習指導をいかに改善すればよいか」という問題を、今後数年にわたる中心的な研究課題としてとりあげることにしたのである。ところで、本県のように山間へき地が多く、小規模学校が過半をしめている所では、学力水準の向上をはかるには、まず第一にこうした地域の学校の教育施設設備の充実、教育環境の整備改善を考えねばならないであろう。そしてそこには、行政的措置をまつところはなほ多いのであるが、このへき地教育の向上については、当研究所では、別に、「へき地教育振興に関する研究」「へき地教員の長期研修」を行なって、その打開に努めており、

さらに全般的な教育施設設備の問題は、これまた「小中学校施設設備に関する研究」や「高校定時制分校の施設に関する研究」としてとりあげてきている。それで当面の学力問題の研究としては、こうした教育条件の整備に関する問題は別にして、むしろ学力を形成する中核の問題であるところの学習指導そのものをとりあげて、これを内面的に掘り下げてゆきたいと考えるのである。けっきよく、「本県児童生徒の学力を伸ばすには、学習指導をどのように改善したらよいか」という問題が、学力研究としてここにわれわれがとりあげる中心的な内容であり、また、この研究の目的でもある。

さてこの「本県児童生徒の学力を伸ばすには、学習指導をどのように改善したらよいか」という研究主題に直面して、最初に問題になるのは、「本県児童生徒の学力を伸ばすには」とある、その伸ばすべき学力とは一体どのような学力をさすのかという問題である。たとえば、もしこの学力を読み書きそろばんの技能であるとするならば、これを伸ばすべき学習指導は当然そのような立場から考えねばならないであろう。このように伸ばさるべき学力の内容に応じてその指導が変わってくるわけである。学習指導を考えるにはこれに対応する学力の内容をまず考えなければならないわけである。しかし、この学力をどう考えるかという問題は実はなかなかむずかしい問題で、簡単にはかたづかない問題である。たとえば、この学力を知識や技能を中心に見る見方もあろう。あるいは態度・習慣を重視する考え方もあろう。あるいは学力をそれらの総和の中にあるのだという見解も成り立つであろう。さらにまた学力を個々の教科に分けて別々にこれを見ても意味のないことで、一個の人格の中に統一されたすがたとしてとらえなければならないであろう、等々、いろいろな見解が出てくるのである。そのいろいろな考え方にしたがって当然学習指導も変わってこなければならないわけである。学習指導の内容や方法が歴史的に幾変遷してきているのも、こうした学力観の違いに基づくものであろう。このように、学力をどのように見るかという問題は、学習指導を考えるうえに根本的な問題なのである。この問題をぬきにして学習指導を考えるわけにはゆかない。

われわれの研究も、実はこの問題から出発したのである。しかし度重なる研究討議も、われわれの間に、この学力観についての共通した意見の一致を見るに至らなかった。それで、いま早急に統一的理解を求めることをせず、むしろこの研究の最終段階における学力観の豊かなみりを期待して、具体的な研究作業を進める間に各人それぞれの学力観を育ててゆくことにした。けだし、この学力観の問題は、学力研究における最初の問題であるとともに最後の問題でもあろう。学習指導の問題は、常にこの問題に導かれつつ、またこの問題に帰り、永遠の課題として、どこまでもこの問題を追求してゆくであろう。

とにかくわれわれは具体的な資料をとおして、本県児童生徒の学力の実態を見てゆくことから始めなければならない。それにはいま特別の調査を要せずに手近かに得られる資料として、全国学力調査や高校進学学力検査をとりあげることを考えてよいであろう。

特に後者は、10年間の実績をもち、毎年中学校卒業生の半数近くが受検しており、その問題は、単に高校入学者選抜の資料という見地からだけでなく、県内中学校教育を望ましい方向に発展させようという意図のもとに、中学校教育の学習内容をじゅうぶんに検討し、全教科の各領域にわたって、できるだけ基礎的な、本質的な問題をと、さらに実技をも加えて、慎重に作成されているものである。その内容も、実施の方法も、きわめて客観的であって、その検査結果は、本県中学校卒業学年の学力を見るうえにじゅうぶん参考になるものと考えられる。

このような意味から、われわれの研究の第一年度として高校進学学力検査の最近5か年間、昭和30年度から34年度までのものを、全教科にわたって検討することにしたのである。（なお教科によっては全国学力調査についても若干の検討を試みた。）研究所員全員がそれぞれ専門の教科を担当し、大小の問題についてたえず全所員が共同的に意見の交換をしつつ研究を進めていった。さらに各教科は、それぞれ数名の専門教師や指導主事の協力を得て、これもまたそれぞれに共同的な体制をとって研究を進めていった。その意味で、この研究は

共同研究の体制をとって進められたといつてよいであろう。ただ所外からの協力の程度は各教科によって異なっている。あるいは部分的に文書や口頭で意見を求めたり、研究協議会に数回参加していただいたり、あるいは全面的にその原稿の執筆までお願いするなど、その程度はいろいろである。

次にわれわれは、この高校進学学力検査を資料としてどのような研究を行なったかについて少しく述べておきたい。

この学力検査を中学校卒業学年生徒の学力を考察する資料としてとりあげたことを前に述べたが、これを実際に資料として扱うには次の諸点を考慮する必要がある。

(1) 県内卒業生の半ば近くが受検しているとはいえ、その生徒は高校進学を希望しているという特殊の条件のもとにあるものであり、かつ正常の学習以外にいわゆる受験勉強の影響も考えられる。したがって、彼らをそのまま現在の中学校卒業学年全体の正常な標本と見なすわけにはゆかず、この検査結果も、現在の中学校生徒の学力の実態をそのままあらわしているものと即断するわけにはゆかない。

(2) 問題は、中学校の指導内容の各領域にわたって、かたよりのないようによく考慮が払われているが、検査時間や検査用紙等に制約されて、その分量が少なく、各領域のほんの一端がとりあげられているに過ぎない。しかも領域的にのみならず、学力の全体を見ようとするところから、その視点が多角的であり、したがって、ある視点から学力を見ようすると、この資料は部分的にしか利用できず、きわめて断片的なものに過ぎないものとなっている。

(3) 客観的なペーパーテストが主であるため、態度や技能というような面についてはじゅうぶんに見ることはできなかったものと考えられる。また知識・理解の面についても、おのずからそこに限界があって、詳しい思考過程を見るとき、微妙な思考作用を検証するとか、こうしたことをこの検査に期待できないことは、検査の性格上、当然のことといわねばならない。

この高校進学学力検査は以上のような性格をもつものであるから、この検査結果の成績から直ちに本県中学校生徒の学力の実態をみるということとはできないのである。中学校生徒の学力の実態をみようとする見地からは、この資料はそこにあらわれた検査結果をとおして、そのおよその傾向を推察するにとどまるものである。この資料はむしろその個々の問題に対して受検生がどのような反応を示したかを見る点に意味があると思われる。実は一つの問題の解決には種々な学習効果がからみあって出てくるので、その個々の問題に見られる生徒の反応を見てゆくことによって、そこにその背後にある学力をかなり広範囲に考えてゆくことができるのである。しかもこの検査問題は前に述べたように、断片的ではあるが多面的多角的であるので、これらの問題をとおしてその背後にある本県中学校生徒の学力を探ってゆくことは真に興味深いものがある。そこに本県中学校生徒の学力にひそむ種々な問題を探り出すことができるのである。つまりこの資料は、本県中学校生徒の学力の実態を鳥瞰的に概観する資料としてよりも、むしろその実態を内面的に探り考えてゆく資料として役立つように思うのである。

以上のような見解から、われわれの研究は、その個々の問題を吟味し、そこに見られる生徒の反応を解釈してゆくという方法を取った。そしてそこに本県中学校生徒の学力の実態やその欠陥を考察し、学力と学習指導の問題点を探ってゆくことにしたのである。ただこの際に各問題の正答率は出ているが、誤答例がはっきりしないため、その解釈には推測を含むところが少なくないと思われる。もっとも、実際に採点を行なった高校教師の協力もあるので、誤答の傾向もある程度推察はできたのであって、この研究はそのような基礎の上に進められている。

ここに刊行する紀要は、以上のような研究の結果をまとめたものである。すなわち、高校進学学力検査の個々の問題に即しながら、まずその問題のねらいを吟味し、その問題に対する生徒の反応をしらべ、生徒の困難を感じた原因を考え、それに関連して学習指導上の問題点を見出そうとしたものである。もし

てさらに、そうした問題点に対してどのような学習指導が平常から行なわれることが、もっとも適切有効なものであるかを説いたものである。この最後の点については、多年教育実践の場において練達した技能をもって指導に当たられている小中高校教師や指導主事の協力のもとに、特に教育実践に役立つようにとの念願から解説したものである。その言説には経験に基づく多分に主観的なものが多いかもしれないが、それだけにまた実践的意義も深いかと考えられる。ひとり中学校のみでなく、小学校、高等学校においても、学習指導の参考としてこの紀要が活用され、県内児童生徒の学力がますます向上することを念願してやまない。

以上述べてきたように、この紀要は高校進学学力検査を資料として取り扱ってはいるが、学力検査問題そのものの批判や改善のための研究でもなく、また高校受験指導の参考書として書いたものでもない。われわれの学力研究の第一年度の研究を、教育実践の場を多分に考慮に入れてまとめたものである。われわれの研究は今年度探求した学習指導上の問題点を、今後さらに一層深く究明し、あるいは、ここに結論的に述べている指導の実際を、さらに深く考え、あるいは理論づけ、あるいは検証するというふうに進められてゆくであろう。大方のご批判とご協力をお願いする次第である。

最後に、この研究のために貴重な時間と労力をさいてご協力を惜しまれなかった各位に対し、心から感謝の意を表するものである。

昭和 35 年 1 月 30 日

新潟県立教育研究所長 柴 田 美 穂